

# 筑紫女学園大学リポジト

Recognition and Relationship of Daily Living related Activities and Educational Psychology

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: クマール, スレンダー, KUMAR, Surender
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/576

### 教育心理学と日常生活関係の理解

スレンダー・クマール

## Recognition and Relationship of Daily Living related Activities and Educational Psychology

Surender KUMAR

#### Abstract

In the developmental stages, an infant starts turning the side at 5 months, sitting at 7 months, crawling at 10 months and standing—walking at 15 months. There are many known reflexes as grip, standing, sucking, rooting, parachute, hand regard etc. and still many unknown. Certain developmental check points are there as at the age of 3 months, sees the hands; at one year feels happy at escaping if chased. At two years, wants to do the same work as elders are doing. At the pre—school level, sleeping time reduces and day activities increase. Control of emotions and social development activities start. In learning, intentional learning and unintentional learnings acquired and can recognize the things without seeing or by past experiences as which family member came in the house by listening the sound of feet or sleepers. Cognitive knowledge, language, and physical developments get maturity.

Key words: Development, daily living activities, educational psychology, learning.

#### はじめに

子どもの発達の時期は乳児期(0歳から2歳)、幼児期(2歳から7歳)、児童期(7歳から11歳)、青年期(11歳から18歳)、成人期(18歳から20歳まで)などに分類されている。発達専門家によって少しずつ違っており、平均的には上記のようである。赤ちゃんは受精後290日又は37-41週間又は10カ月で生まれる。生まれた時正期産の基準体重は2500グラムぐらいで、身長は50cmぐらいである。生まれてすぐ体重は一旦10%程度減って、一週間で回復する。それは環境が変わって慣れるまで負担がかかるからと考えられる。今まで栄養、酸素など親に頼っていたので、生まれてから自分で息を吸い、栄養も自分で得られなければならないのである。体重が1000グラム以下で低体重児、4500グラムぐらいで巨大児なども生まれる。医療が発展して低体重児は36週以前の出産でも体重500グラムまでは生きていける。発達の異常がほとんどないが、時々小頭症などの病気も見られる。出産が2週間遅れると、生まれる赤ちゃんの体重が基準体重を超えて巨大児として生まれる。そのと

きも発達の異常がないが、時々水頭症という病気が見られる。体内にいる時、6カ月ぐらいで動きだし、親の声も聞こえる、生まれてから夜泣きなどのとき体内にいるときの音や親の心臓の音や心臓の近くで抱っこすれば泣き止む。夢も見る。

生まれてすぐ、泣いても涙がみられない、唾液もない、あやしても笑顔にならない、見えるのも ぼんやりで白黒、聞こえるのもぼんやり。最初は顔にコントラストの強いところ、髪の毛と皮膚の 間、3カ月以上は顔の動くところを見ている。様々な研究で子どもの発達について沢山のことが分 かってきて、まだ分からないことも沢山ある。生まれてすぐの赤ちゃんもいくらかの模倣ができる。 2ヵ月ぐらいからあやすと、笑顔ができる、涙や唾液も見られ、3カ月ぐらいから色も見えるし、 追視、ハンド・リガード反射、もしくは、手調べが起こり隋運動も首まで通って首がすわる。立ち 直り反射の確認もできる。5-6カ月ぐらいは、声を立てて自分で「あ・・あ・・あ・・」と声を 出して遊ぶ。それは言葉につながる音と言われている。言葉の前の音はクーイングと言われている。 6カ月以上は人見知りが出てくる、鏡に見えるのは自分だと分かるのはそれ以降である。生まれて すぐは光るものに興味が入り、それから音が鳴る方も気にして見る。5カ月ぐらいには非対象運動 ができて寝返りが始まり、2次元から3次元の世界も見える。6カ月ぐらいは両手を別々に使え、 「にぎる」こともできる。乳児期の運動発達の月例ごとの過程によって1カ月ぐらいの赤ちゃんを うつぶせにしたらあごを上げるぐらいの力がついてくる。寝返りができるまでは、うつぶせにする のは息ができなくなるので危険である。2カ月ぐらいは胸までを床からあげるぐらいの力、3カ月 児は物をつかもうとする、実際につかむことはできない、単なる把握反射の反応のようなもの。も のを持たせても手の平が開いたり閉じたりする。4カ月では支えられて「すわる」ことができる。 それは隋運動が頭から腰のすぐ上までにできたからである。人間の赤ちゃんの場合は隋運動が頭の 近いところから始まって足の方にできる。だから、人間の赤ちゃんは先に首がしっかりして、手、 腰、膝、足の順でしっかりする。最後に、ひざ、足首、足の裏が使えてやっと立つことができる。 立つことが先にできて、そのあと、お座り又は首がすわるということではない。何らかの発達の異 常がある場合は、そのプロセスに何らかのずれが生じる。

5カ月では、まわりのものをつかむことができ、寝返りも始まる。寝返りは人生の初めての移動運動である。しかし、みんなが寝返りをするわけではない。6カ月児は近くにぶら下がったものを「にぎる」こともできる、それは目線が高くなって目の上の物にも興味が入るからと考えられる。それぐらいでは、両手も別々に使えることができ、「つかむ」こともできる。楽しかった経験などを2週間以上も覚えている、脳もしっかり関与するようになり、ほとんどの反射や自発的な動きからコントロールした動きに変わる。7カ月では、ひとりですわることもできる。お座りが完成するには両手が自由に使えるようになることが必要である。お座りが完成ではないとき、座って周りのものを手で取ろうとする時、そちらの方にコローンと転んでしまうこともよくある。しかし、パラシュート反射があるので手がその方向に出て体を支えてお座りの姿勢に戻る又はキープできるようになる。8カ月ぐらいは手を支えられると立つことができる、9カ月ではソファー、テーブルの脚

などにつかまって立っていられるようになる。「つかむ」ことも上手になる。発達の早い子はそれ ぐらいでもう歩いている様子も見られる。10カ月児は「ハイハイ」ができる。「ハイハイ」したば かりの赤ちゃんは一回前に進むより、後ろに下がってしまって好きなものから離れて泣くことも多 い。それは手が足より先に使えて手の力が強いからである。だだし、一週間で前の方向に進む様子 が見られる。「ハイハイ」にはバラエティーが多く「よっつばい | 「ずりばい | 「たかばい」などが ある。ときどき座ったまま一つの手を前に出して、それにたよって前に進むような姿勢も見られる。 寝返りや「はいはい」はみんながみんなするわけではなくて、個人差がある。「ハイハイ」したば かりの赤ちゃんは段差をよこぎって前に進む。「ハイハイ」してから一ヵ月ぐらいの赤ちゃんはも う段差をよこぎらない。段があって落ちるという感覚を体で感じるようになると考えられる。11カ 月では手助けで手を引かれて歩くことができる。それは、ひざや足首や足の裏の使い方が上手では ないから歩くのに援助が必要である。12カ月では家具や親の脚につかまって立ち上がることができ る。一般的意識では一歳児は歩けるものともある。13カ月児は階段をのぼることもできる。降りる ことはまだ出来ないのである。それは手の力が強く畳やちょっとした段差も楽々「ハイハイ」でき るからと考えられる。14カ月では隋運動は足まで出来て一人立ち、15カ月ではひとり歩き「あんよ」 もできる。上記の過程は平均的であって個人差が結構ある。専門家のアドバイスとしては発達の速 さはそれぞれであって、個性を正しく認識し、ほかの子どもとの比較ではなく、その子どもが持っ ている特性や発達リズムを最大限に伸ばしてやることが大切な育児努力だと言われている。

#### 反射運動 (Reflex)

赤ちゃんの体に何等かの刺激が与えられると、それに対する運動が無意識のうちに起こってくるもので、生理的には脳がほとんど関与しないで行われる運動である。赤ちゃんの体に生まれつき沢山の反射がついていてまだ知られていないものも少なくない。一般的には体内の動きや自発的な動きとしても知られている。ほとんどの反射が生まれてから、半年ぐらいには消えていくことが多い。何等かの発達の異常があると様々な反射の確認出来なかったり、あるいは長い間残ってしまうものもある。

<u>バビンスキー反射</u>:赤ちゃんの足をくすぐると、足の指が広がる。その広がりは親指と残り四つの指の方向は反対向きになることもある。生後6か月ぐらいで見られなくなる。<u>把握反射</u>:赤ちゃんの手に触れたもの何でもつかんでしまう反射。生後4か月で消える。起立反射:赤ちゃんの身体を支えて立たせ、足の裏を固い平らな台につけると、連続的な足の曲げ伸ばしが起こる。実際にはまだ立つことはできない。生後3カ月で消える。<u>匍匐反射</u>:赤ちゃんの腹を下にして寝かせた姿勢にしておくと、腹ばいするように両足が交互にリズミカルに動かす様子が見られる。腹ばいで前に進む発達準備はまだ出来ていない状態である。生後3カ月で消えることが多い。<u>モロー反射</u>:赤ちゃんの足や腰当たりに軽く手をおいて抑え、首を支えながら身体を起こして、急に首を支えている手を瞬間的に離すと、赤ちゃんが両腕を広げ、まるで何かに抱き着くようにする様子が見られる。手を離してすぐに頭を支えなければ頭が下にぶつかる危険性がある。この反射も生徒3カ月で消え

る。保健所では4カ月検診でよく確かめられる反射の一つである。あお向けの姿勢から両手を引い て起こすと首がついてくるのであれば首が座っていることになる。反射が消えることはその動きが できなくなるではなく、その動きは赤ちゃんのコントロールした動きに変わる。それぞれの反射は 人間の赤ちゃんの場合脳が関与するようになると、その動きの調整などが利いてコントロールした 動きにかわるというものである。2歳ぐらいの赤ちゃんであれば足の裏をくすぐってももう足の指 がひろがらずに、足を引いたりする。探索反射:赤ちゃんの口の周りに何かをふれるとその方向に 顔を動かして口に入れようとする様子。ちちさがし反射とも呼ばれ、英語では Rooting Reflex とい う。生後4カ月で消える。吸啜反射 Sucking Reflex:赤ちゃんは口の中に触れたものを吸ってしま う反射。生後3カ月で消える。吸啜反射は生まれる1カ月前からしか現れない。低体重で生まれた 場合吸啜反射の現れがなく、自分で母乳やミルクが飲めない。探索反射も吸啜反射も栄養をとるた めの動きと考えられる。驚愕(きょうがく)反射:赤ちゃんの両手足がときどき急に上がって驚い てしまう様子が見られる。それは寝ている又は起きている状態でも確認できる。生後4カ月で消え る。咬(こう)反射 Biting Reflex:赤ちゃんは口に入れられたものを噛んでしまう様子。生後3カ 月で消える。離乳食につながる反射とも言われていて赤ちゃんの歯が入るときよく確認できる。月 齢によってミルクの成分も違っていて、月例につれミルクの成分が濃くなる。母乳またはミルクだ けで栄養が足りないので沢山の栄養を噛んでとるために歯が生えて少しずつ固い食べ物も食べるよ うになる。ハンド・リガード反射:生後3カ月ごろ赤ちゃんは自分の手を見つめ、すり合わせたり、 口に持っていって吸ったりする反射で、手調べ反射とも言われている。立ち直り反射:首がすわる ことにつながる反射で、赤ちゃんが見ているものに対して体の位置が変わっていても頭や目の垂直 の状態を保つ様子。体を固定した場合、首が動いて広い範囲でものを視野に入れる。首と体の分離 した動きができ、首がすわったことになる。ハイガード反射:赤ちゃんが立つ「あんよ」のときに 見られる反射で、歩くとき手を顔の前にして歩く様子。非常にバランスが取れていない動きで、腰 のふりもあまりなく、がにまたで歩く。ハイガード反射として転んでしまう時手が前に出るように 準備をして顔を打たないように守る姿勢である。パラシュート反射:赤ちゃんのおすわりや歩く時 に確認できる反射である。おすわり又は歩く直前にみられる反射で、歩くとき手が上に上がって、 転ぶ時、手が前に出て顔を打たないような状態である。まだ知られていない反射も沢山ある。

#### 情緒や社会性による発達確認ポイント

満3カ月:もの、顔、手などをじっと見つめる。外に連れて行くと機嫌がよくなる。アバババ!などであやすと顔を見て笑う。 3カ月未満では顔に髪の毛と皮膚の間コントラストの強いところ、それ以降は顔の動くところを見ている。満6カ月:部屋に誰もいないと泣いてしまう。気に入らないことがあるとそりかえる。知らない人が家に来ると、じっと見つめる様子がいつもとは違う。満10カ月:抱かれたいアピールが強く、声を出し、身を乗り出す。食べ物や食器を見ただけで食事を期待し、喜んで待つ様子が多い。「いない いない ばあ」などを喜ぶ。鏡の中に写っているのは自分だと分からない。大人の怒った顔を見て、怒っていることがはっきり分かった様子を見せる。お

母さんの笑顔で笑いに、怒った顔で泣きにして返せる。満1歳2か月:追いかけられると逃げて喜 ぶ、危険などを避けることができずに道にも出る。鏡の中の自分におじぎをしたり笑いかけたりし て遊ぶ。家族の集まりの中にいるのを好む。乳母車の中から、道を通る派手の服装の人、犬、猫、 音が多い自動車を一心に見る。満2歳:大人が電話をかけていると、自分も電話に出たがる。歩く とき、手を引こうとすると、ふりほどいて一人で歩こうとする。自分で歩ける、あるいは、手をつ ないだら動きが制限されるなどの思いと考えられる。友達と手をつなげるようになる。大人から注 意されても、自分の要求を変えようとしないことが多い。おもちゃで遊んでいると、きりがなく長 い時間遊んでしまって、ご飯だよと呼んでも「待って、待って」と言う。しばらく待ってもこない。 おかたづけと言っても「いやいや」という。満3歳:一度期待をもたせてしまうと、だましがきか ない。例えば:次の日曜日は Mc に行こうと言ったら、その日曜日に、今日は Mc ですよね、忘れ てはいない。買い物中大人しくしたらラムネ買ってあげると言ってしまったら、最後にラムネは忘 れていない。滑り台公園に連れて行くなども覚えている。年下の兄弟や子どもの世話をやきたがる。 例えば:抱っこしようとしたり、ご飯やおやつを食べさせようとしたりする様子。電話ごっこで、 交互に会話ができる。例えば:おばあちゃんに今日は幼稚園で運動会の練習でブリッジの練習をし たと分かりやすく、どこで、いつ、何をしたのかの話ができる。物を隠したら長い時間探す。見知 らぬ人にまだまだなじみにくい。はじめまして、おはよう、ありがとうございますなどの挨拶はで きない。恥ずかしいだからのではなく、まだ見知らぬ人にどう関わればよいかの仕方を身に着ける 最初の段階だからと考えられる。

#### 幼児期(2歳から6、7歳)の発達の特徴

幼児期では心身ともにしっかりして人間らしさを増していく。体力もついて睡眠のリズムも成人に近づき、活動時間も拡大する。 2 時間ごとに飲んで寝るリズムがなくなり、起きている時間がだんだん長くなる。 4 歳以降は午睡もしない。知りたいことに興味を持つ。親との親密の関係を土台に、仲間への関心も強くなり友達を求め、幼児期ではグループでの遊びが多くなる。 運動の発達: 2 歳頃までには、転ばないで走れるようになる。 2 歳過ぎから階段も交互に足を出して上がり下がりする。 3 歳ごろから跳んだり、ブランコに乗ったり、ケンケンパしたり、スキップや片足立ちができるようになる。 5 歳頃には細かい運動を含めてどんな運動もできる。例えば:手先、指先を使った細かい動作やつまむことが上手になる。 2 歳までにスプーンで上手に食べるようになる。 自分でピーナツを割って食べられる、キャンディーの袋やポテトチップの袋を開けられる。靴を脱ぐのは2歳前、衣服を上手に脱ぐのは4歳前後、ボタンをはずし・はめるのは3歳半ぐらいにできるようになる。 情緒や社会性の発達:様々な情緒の理解として喜び、怒り、嫌悪、恐怖、悲しみ、驚き、中立などの表情が分かる。共感、不安、失敗、競争などの感情がでてくる。 5 歳頃までには成人の感情に近づき、自分の感情をある程度コントロールできるようになる。転んでも泣かないなど。親から離れても見える範囲なら自由に遊べるようになる。 2 歳頃になると、大人と同じことをやりたがる。例えば:お料理、掃除、家の手伝いなど。自己主張も強くなるが、うまく対処できないので

子ども同士のトラブルも生じやすく、「貸して」「ごめん」などの表現ができない時期である。大人 が間に入らないとトラブル処理ができない。3歳ごろになると友人と一緒に遊ぶ楽しさが分かるよ うになり、社会性の行動が見られる。4歳過ぎになると、好んで集団で遊ぶ。みんなで砂場で団子 作り、ケーキ作りなどの遊びをする。5歳児は集団の中でそれぞれの役割をもって協力し合い、子 どもだけでどんどん遊びを発展できる。例えば:川とダムを作って水を流す、違うジャンケン、替 え歌、言葉遊びなど。けんかが生じても子どもだけで解決することができる。「ごめんね」「遊び終 わったら貸してね」などが言えるようになるからと考えられる。認知の発達:1歳を過ぎると想像 遊びができ、目の前にいないものでも模倣や思い出すことができる。「いない いない ばあ」の 時、目の前の手の指が開いていて目も開いた状態、お母さんの後ろやカーテンの中に隠れることも 多い、犬のまね、パンダのポーズ、チョキ、ウサギのまね、人形を寝かしつける、ジュース飲ませ る、ご飯食べさせるふり遊びなど。2歳児は隠した人形を見つけられる。空間の理解ができる。ごっ こ遊びとしておもちゃごっこが見られる、イメージが生じないと成立や思い出せないこともある。 例えば:リンゴは何色。象が大きい、アリが小さい、電車が長い、髪の毛が短い、ママのコーヒー は熱い、アイスクリームは冷たい、イスは重い、キティちゃんのぬいぐるみは軽い、などの感覚を 分かるようになる。お金の感覚はまだない3歳児までは10円玉と100円玉の中から10円玉を選ぶこ とが多い。1円も上げたら大いに喜ぶ。ピアジェーの発達研究による、形や量の保存の法則がまだ わからない時期でもある。ケーキの分け方でいつも他の兄弟の分が大きいと言う。Theory of mind の研究によれば相手の気持ちも分かるようになるのは5歳ぐらい。3歳前は自分でものを探すこと ができないこともある。言語の発達:1歳6カ月には、「ネンネ、イヤ、わんわん、ニヤーニャー」 などのような2語文を言える。2歳では「コレナーニ」と物の名前を聞きたがる。第一質問期とも 言われている。 2 歳 6 カ月では「ワンワンがイル」など短い文章を使えるし、「ネコニタベテイル ヨ」など誤りも多い。きれいに言えないことも多い。例えば:ジャガイモをガジャイモ、トウモロ コシをトコロモシ、テレビをテベリ、砂場をすばな、スカベッティ、ひまなつり、エベレータ、煙 突から「くもり」が出ているなど。2歳10カ月は第2質問期と呼ばれ、「ドウシテ」と物事の理由 を聞きたがる。例えば:今日なんでドラえもんのテレビがないの、パパなんでアイロンをしている のなど。3歳では3語文以上が使用でき、文章と文章をつなぐ単語「ソシテ」「ソレカラ」などを 使う。例えば:朝起きてからご飯食べた。 5 歳を過ぎると大人の言語にも関心が高く、大人っぽい 表現をまねて覚えようとする。例えば:悪口を言わないようにしましょう。自分の経験を他者の前 で分かるようにしゃべったり、挨拶をしたりするようになる。幼児期では言葉づかいも正しくなり、 幼児語も少なくなる。例えば:何を「何ですか」と言う。

#### 学習 Learning

何かを経験することによって新しい行動を獲得することを学習という。例えば:字を書くこと、 箸の使い方、自転車の乗り方や車の運転、ピアノの弾き方など。<u>意図的学習</u>:社会的に価値がある ことの学習。例えば:何らかの資格、それぞれの目的学科での学習など。偶発的学習:自分が学習 していることに気づかないまま学習をしていること。例えば:犬にかまれた経験がある人は犬を見るだけで怖がる、子どもが白衣の人を見るだけや薬の袋を見るだけで泣く。ライオンの絵を見ただけでも怖い、ウサギの絵は可愛い、チャイムが鳴ったら学生が授業の始まりと終わりを思い出す、家の中でスリッパの音を聞いただけで、誰が通ったかが分かるようになる。博多にいたら自然に博多弁を話す、友達が話す単語がいつの間に自分に移されてしまうなど。学習のタイプも沢山ある。知覚学習:視知覚・聴知覚機能などが経験によって変化していく学習。映画、黒板、TVでの学習。知覚運動学習:自分の体を動かして眼で見たものを上手につかむこと。態度学習:人や物に対する態度や特徴の学習。例えば:リンゴは赤くて甘いもの。言語学習:文字、単語、文章、言葉などの学習。教室で Right, Light などの意味と発音の学習。概念学習:多くの異なった事象の中から共通性を見つけ出して、何等かの言語で代表させる学習。例えば:身支度、朝、ひなまつり、TPP、運動会など。課題解決学習:はっきりとした目標があり、その解決のために仮説を立て、行動し、目標を獲得する学習過程。例えば:鶴折り紙の折り方、針に糸を通す、公式を覚える、バスの乗り方を学ぶなど。

#### 学習の理論

古典的条件づけとしてパヴロフの犬の実験によって、犬に餌を見せると犬の口の中に唾液が出て くる。犬の前に懐中電灯の光を照らす又はベルを鳴らすと唾液が出てこない。ただし、懐中電灯の 光やベルの音を提示して餌を出すプロセスを何回も繰り返すとそのうち唾液が見られる。それは餌 が来た、もしくは、もうすぐ餌が出てくることに結びつかれるからである。それによって「S-R 説」刺激に対して反応がある、「刺激―反応」が結びつかれたことは一つの学習のパターンであっ てそれを身に着けること。例えば:「お元気ですか」に対しての答えは幼い時から「はい」「いい え」などであって大人になっても以前習ったそのパターンを使っている。家の中にスリッパの音を 何回か見てその後見なくても通る人を分かる、CD などにある全部の曲は覚えていないけど一つの 曲が終わると次を思い出している。その日になったらその日のすることや時間割を見なくても分か るなど。それによって私たちの体も反応するようになる。例えば:12時に鳴ったらお腹が鳴りだす。 ケーキを食べ過ぎた次の日、ケーキと聞いただけで気分が悪くなる。B F Skinner のオペラント条 件付けとしてネズミの実験によって、自発的・能動的な反応に対して、反応後に強化が与えられる と、その反応が増加する。ネズミにレバーを押して餌が当たるとレバーを意図的に覚える。様々な 刺激に対して私たちは普通に反応しても、全部のことを覚えていない。しかし、反応後に何等かの いいことが当たるとそれだけを覚えている、罰があたるとそれを忘れようとする。「いい結果をも たらす行動は繰り返されますが、何の結果もない行動は繰り返されません」。例えば:単位もらえ るから授業に来て勉強する。車の運転免許証がとれるから頑張って運転の仕方を身に着ける、ピア ノである曲を弾く学習など。ソーンダイクの試行錯誤説としてネコの実験によってネコは試行錯誤 をしながらレバーに気づき、おりの外への出方を学習した。私たちは試行錯誤しながら学習するこ ともある。例えば:あるピアノの曲は一回では弾けない、車の運転免許は一日で取れないので試行 錯誤をしている。練習の法則、準備(人的、物的)の法則、効果の法則が必要とされる。W. Keller の洞察説によれば、学習の本質は試行錯誤的な行動によるものではなく、目標と手段の関係を見通してから行動することがある。チンパンジーは二つの棒をつないだり、二つの箱を積み重ねたりしておりにぶら下がった、外に置かれたバナナをとることができた。チンパンジーは沢山の試行錯誤をせずに脳で考えてから行動したことの結果である。

そのプロセスで見ると私たちの日常生活には沢山の教育心理的な行動や過程、認識、感覚を確認することができる。日頃は全然気づかずに無意識で行動しているのだが、考えてみれば発達や学習の過程や理論などが日常的であって応用的に沢山使われている。

#### References/引用文献

Damon, W, Learner, R. M. (2008) Child and Adolescent Development. Hoboken, NJ: Wiley.

Kumar, S., & Harizuka, S. (1998) Cooperative learning—based approach and development of learning awareness and achievement in mathematics in elementary school. *Psychological Reports*, **82**, 587-591.

Kumar, S., Y. S. Kim, Oh, K. S. (2011) Cognitive Development in Pre-school and Elementary School Children.

Annual Report of Journal of the Humanities Research Institute Chikushi Jogakuen University and Junior College, Vol. 22, 89-101.

Kumar, S., Harizuka, S., Mandal, M. K. (2012) Side bias in Autism: Handedness and Footedness. *Journal of Rehabilitation Psychology*, **38** (2), 15-19.

Kumar, S., Y. S. Kim, Oh, K. S. (2015) Existence of Cognitive Learning Processes in our day to day life. *Journal of Chikushi Jogakuen University, Teaching Practice Support Center*, 創刊号, 87-95.

Myers, D. G. (1999) Exploring Psychology, 4th edition. New York: Worth.

Snow, C. E. (1984) Parent-child interaction and the development of communicative ability. In R. L. Schiefelbusch & J. Pickar (Eds.), *the acquisition of communicative competence*. Baltimore, MD: University Park Press. Pp. 69-107.

赤井 美智子・神田 久男・春原 由紀 他 (2002) 子どもの発達と心理臨床。樹村房

井戸 ゆかり (2012) 保育の心理学 I-実践につなげる、子どもの発達理解。萌文書林

岡村 浩志・藤田 主一 (2000) 新しい教育心理学。福村出版

後藤 宗理(2002)子どもに学ぶ発達心理学。樹村房

小林 芳郎 (2003) 心の発達と教育の心理学。保育出版社

小林 芳郎 (2003) 乳・幼児の発達心理学。保育出版社

小林 芳文・上原 則子・伊奈 忍 他 (1999) 幼児のためのムーブメント教育実践プログラム 1 - 感覚 運動ムーブメント。コレール社

昇地 三郎(1998)新教育心理学。ナカニシヤ出版

長谷部 比呂美・日比 暁美・山岸 道子 (2014) 保育の心理を学ぶ。ななみ書房

平井 誠也(2009)発達心理学要論。北大路書房

藤田 哲也 (2012) 絶対役立つ教育心理学―実践の理論、理論を実践。ミネルヴァ書房

武藤 安子・吉川 晴美 (2000) かかわりを育む保育学。樹村房

(スレンダー・クマール:人間形成専攻教授)